

**書評: Alexandra Y. Aikhenvald *The Art of Grammar —A Practical Guide—*
Oxford: Oxford University Press, 2015, xxiii+380pp.**

林 範彦

神戸市外国語大学・jinozu@yahoo.co.jp

キーワード：フィールド言語学、参照文法、言語調査法、文法執筆

「現地調査は楽しい。なにしろ自分がノートに書き取っていることの殆どすべてが今まで世に知られていなかった新情報なのである。しかし本当の苦労は、帰国後それらの資料を整理し、まとめ、発表までもって行く段階にある。年を単位のつらい日々には堪えねばならぬ。」(土田 1978: 36)

1 はじめに

本稿は Aikhenvald 氏¹の最新刊の著作である *The Art of Grammar —A Practical Guide—*² の書評である。本書は同氏の豊富な現地調査に基づいた言語研究と 30 年に渡る参照文法の読破に裏打ちされた類型論的分析の経験則の集大成と言える。端的に述べれば、言語研究者がいかにしてよい文法を記述し、また他の参照文法をいかにして読むべきかをまとめた書籍であると言えよう。本稿ではこれから現地調査に基づく言語学(通称「フィールド言語学」)を始める人だけでなく、これまでいくぶん経験を積んだ研究者にとっても有用な 1 冊であることを述べたい。

本稿の構成は以下のとおりである。まず 2 節では本書の各章の概要および要点を簡潔にまとめる。そして 3 節で 2 節での内容をふまえ、本書の特長と問題点の指摘を行う。4 節で(特にこれから始めようとする)フィールド言語学徒に対する本書の利用法と今後読み進めるべき関連文献を提示する。5 節で本稿を締めくくる。

2 本書の構成

本書は全部で xxiii + 380 ページである。本文に入る前に、“Preamble (前置き)”として本書で書かれていることを簡潔に述べている。その後、15 章に渡る本文では、いかにして明解で完成度の高い個別言語の文法を書くべきかが解説されている。巻末 (pp.317–331)には本書に関連する言語学の術語 334 項目の簡明な説明が付されている。本文を読む際には適宜参照しておくべ

¹ 著者の研究に関する情報は現在の所属先である James Cook University のウェブサイトでも閲覧できる。

<https://research.jcu.edu.au/portfolio/alexandra.aikhenvald> (2016 年 1 月 13 日閲覧)

² 本書の邦題をつけるとすれば『文法を書くための技術 (こつ) —実践的な手引書—』とでもなるだろう。

きだろう³。

本文の章立ては表 1 のとおりである。

表 1 本書の章立て

第 1 章	Introduction: to write a grammar (序章: 文法を書くには)	pp.1–29
第 2 章	A language and its setting (言語とそれを取り巻く状況)	pp.30–45
第 3 章	Basics (文法記述の基礎)	pp.46–58
第 4 章	Sounds and their functions (音とその機能)	pp.59–80
第 5 章	Word classes (語類)	pp.81–102
第 6 章	Nouns (名詞)	pp.103–128
第 7 章	Verbs (動詞)	pp.129–156
第 8 章	Adjectives and adverbs (形容詞と副詞)	pp.157–170
第 9 章	Closed classes (閉じた語類)	pp.171–204
第 10 章	Who does what to whom: grammatical relations (誰が誰に何をするか — 文法関係)	pp.205–224
第 11 章	Clause and sentence types (節と文のタイプ)	pp.225–244
第 12 章	Complex sentences and clause linking (複文と節連結)	pp.245–266
第 13 章	Language in context (文脈における言語)	pp.267–285
第 14 章	Why is a language the way it is? (言語がかくの如くある理由)	pp.286–305
第 15 章	How to create a grammar and how to read one (参照文法の書き方と読み方)	pp.306– 316

各章はフラットな形で書かれているが、実質的には 4 つのカテゴリーに分割できるだろう。すなわち、表 2 のようにまとめられる。

以下では、この 4 つのカテゴリーの概要を述べる。

³ 言語学の術語は研究者によって異なった意味で用いられることもしばしば見受けられる。英語で書かれた言語学の教科書には巻末に同様の術語集を掲載しているものも多い (Payne 2006 など)。しかし、そのような教科書の術語説明は簡便なものにすぎない。よって、更に詳しい説明を求める場合は言語学辞典を適宜参照すべきであろう。Crystal (2008), 亀井ほか (1996), 斎藤ほか (2015) などは参考となる。亀井ほか (1996) は特に構造主義言語学や言語学史に強く、詳細な記述に定評がある。一方、Crystal (2008) や斎藤ほか (2015) は最新の理論言語学の用語についても触れており、コンパクトな説明は初学者に特に適しているだろう。

表2 本文部分のカテゴリー

[1]	文法を書くために必要な知識や心得	第1章・第3章
[2]	文法に盛り込まれる内容	第2章および第4章から第13章まで
[3]	言語の歴史的な側面の利用	第14章
[4]	文法のより良い作り方と読み方	第15章

2.1 文法を書くために必要な知識や心得

現地調査を通じて、個別言語の文法を書くためには、ある一定程度の知識や心得が必要となる。本書では第1章と第3章で簡単にまとめられている。

第1章では適切なグロスの振り方やわかりやすい用語の使用、説明順序への配慮、現地調査の方法論など、言語調査を行い、文法執筆に入る前の準備段階について整理されている。

第3章では言語学の基本的な前提知識を最小限に記述している。音体系・語の単位・屈折と派生の区別・語類の区別の方法・句と節の定義など、言語学の初歩的でありながら、誤りやすい事項を丁寧に整理している。

2.2 文法に盛り込まれる内容

ある個別言語の文法が1つの参照文法として機能するためには、包括性がまずは求められることとなる。本書の第2章および第4章から第13章では、何が盛り込まれるべきかが解説されている。

第2章では、執筆対象となる言語の、とりわけ言語外的知識や背景について、その調査と記述の重要性を説いている。対象となる言語は、どれくらいの話者人口をもち、話者たちはどのような生態環境で暮らし、どのような社会構造をもっているのかなどについて、読者はまず示される必要がある。これ以外にも、言語構造の基本的な類型、すなわち、形態論的な類型や語順、音韻体系の概要なども、文法の中心に入る前に示しておくべきだと述べている。

第4章から第12章までは表1に示したタイトルからも推測できるように、言語構造の中核的部分において、特に記述されるべきことを整理している。著者の Aikhenvald 氏は世界の諸言語に対して幅広い見識を有している。しかし、やはり専門とするアマゾン地域の諸言語と、現在所属する大学のあるオーストラリアの諸言語の事例から具体的な知見が披露されていることが多い。

第4章では音素分析とともに、文法内で音素をどのように提示すべきかを述べている。子音では調音点の表示において受動器官(両唇音や歯茎音など)のみを提示している場合が多い。本書では可動器官(舌尖など)も合わせて記述すべきであるとしている。またこの章では区別が困難な接辞(affix)と倚辞(clitic)の区別についてもまとめているので、初学者には特に有用である。

第5章では語類の記述についての注意点が整理してある。各語類は一般的に意味と相関するため、その設定基準に意味を用いたくもなる。しかし、本書では形態統語的基準を中心に据えるべきであると明言している。また、本章では名詞・動詞・形容詞の各語類の下位分類についても概説している。

第6章では名詞句の記述に関する留意点が整理してある。性・数や名詞クラス、類別詞の問題をはじめ、所有構文・格標示・派生と複合についても言及している。特に数と類別詞の記述に注力されていることが伺える。

第7章では動詞およびその周辺事項の記述に関する問題を扱っている。動詞にまつわる事柄としては、テンス・アスペクト・ムードに始まり、モダリティや証拠性 (evidentiality) の問題⁴、方向や移動に関わること⁵、結合価の増減 (valency-changing derivation)、動詞連続、さらに一部の言語に見られる名詞抱合に至るまで多岐にわたる。特にデータ観察の際に注意が必要となる、受動・逆受動・使役・適用態については、その特徴を **Box 7.1** から **Box 7.4** でそれぞれ整理している。動詞に関わる問題は内容も豊富なため、文法執筆にあたっては特別な章を設けてもよい言語もあると述べている。また動詞的な語彙と動詞句の構造に関する言及は参照文法において重要であるとする。

第8章では形容詞と副詞の記述に関する留意点と形容詞・副詞の派生法について整理してある。形容詞は名詞あるいは動詞と形態統語的に類似した特徴を持っているため、それぞれの統語範疇との区別が難しい場合が多い。形容詞は特定の意味範疇に集中的に分布することもよく知られている。しかし、あくまでも統語的機能 (名詞修飾を行う・属性叙述を行う) にそって形容詞を他の語類と切り分けることが肝要である。他方、副詞は形容詞以上に文法的な規定が難しいことが多い。多くは動詞を修飾する。また特定の意味範疇 (様態・類似・評価・程度・位置・時間など) に集中的に分布することを述べている。

第9章では閉じた集合をなす語類として、人称代名詞・指示詞・冠詞・疑問詞・量化詞などの記述に関する留意点が整理してある。各言語において閉じた集合をなす語類の種類は多様であろう。本章末の表 **9.16** では著者の調査しているマナンブ語の閉じた集合をなす語類の一覧を、名詞句の主要部となりうるか・前置/後置修飾のいずれなのか・格標示が行えるかなどの基準に基づいて整理している。また、「小辞 (particle)」という用語は様々な種類の機能辞を指示する可能性を含むため、抑制的に用いられるべきであると述べている。

第10章では項と格標示に関する問題を概説している。本書では統語的な核となる項として S (自動詞の主語), A (他動詞の主語), O (他動詞の目的語) を、周辺的な要素として E (拡張された項) を認める。これらと格標示体系との関与のあり方 (対格言語・能格言語の問題や非典型格標示の問題など)、またコピュラ節や無動詞節の項とのつながりを記述する。また S, A, O は意味役割 (動作主・被動者など) と 1 対 1 に対応しないため、混同しないように強く警告している⁶。

⁴ 本書では 'non-spatial setting' として整理している。

⁵ 本書では 'spatial setting' として整理している。'non-spatial setting' に比して、簡潔な記述におさえられている。

⁶ 意味役割・格・情報構造・統語機能のレベルの区別が重要であることは角田 (2010: 177-239) でも

第 11 章では節と文のタイプについて、節内部の構造・節の統語的機能・語用論的機能と発話行為の関連性などから整理している。コピュラ節や無動詞節は特にその内部構造に着目し、存在・所在・所有・属性・同定などの意味的關係性に注意すべきである。また統語的機能においては主節と従属節の違いに十分留意すべきである。そして陳述・疑問・命令などの発話行為に関係する文のタイプの記述では、動詞の形態や語順、イントネーションなどによって区別されることも心に留めておきたい。

第 12 章では複雑な文と節連結の記述の問題を扱っている。重文の記述に始まり、関係節や補文の問題、交替指示 (switch reference)、軸項 (pivot) 構造や節の相互関係の記述の問題を概説している。特に 1 文を構成する複数の節の意味的關係を記述するには 2 種類の方法が考えられる。すなわち、意味からはじめて、それに対応する節の形式はどのようになっているのかを検証する方法と、節を構成する形式を整理するところからはじめて、その形式がどのような意味タイプに対応するのかを考察する方法である。著者は後者が好ましいと述べている。

第 13 章は文法と文脈の關係性について言及している。話題や焦点といった情報構造の問題を整理し、文がどのような形で語り (narrative) を構成するために結び付けられるのか、コミュニケーションの有り様や発話の型 (speech formulae) などの問題をここでは論じている。また、各言語話者のもつ文化に応じて、語彙に様々な使い分けがなされることもある。参照文法ではそのような語彙の問題についても詳述するのが望ましいとする。

2.3 言語の歴史的な側面の利用

第 14 章は本書で唯一歴史的な側面について言及している。系統を同じくする言語間の共通する特徴や、借用をはじめとする言語接触の問題などについてである。しかし、それはあくまで共時的な記述を行うための説明原理の 1 つとして用いているにすぎない。本書では対象言語と関連言語の祖語の再建を促すという意味ではなく、むしろ対象言語がなぜ現在の状態に落ち着いているのかを説明するための道具として通時的理解を利用せよと促しているのである。またこの章の後半では話者コミュニティの住む生態環境や社会構造に関する学術的配慮が参照文法の説明にも寄与すると述べている。

2.4 文法のより良い作り方と読み方

第 15 章は最終章として、フィールド言語学徒が個別に調べてまとめ上げた文法現象などを参照文法の形としてどのように盛り込んでいくのか、また他の研究者が書いた参照文法をどのように読むべきかを解説している。著者はここで、すべての文法現象について参照文法が説明できるとは限らないが、「ある形式が他と『自由に』交替可能である」⁷と述べることは最後の手

強調されている。

⁷ フィールド調査を行っているときよく遭遇するのが、「A という表現は B という表現と同じ意味だ」とか「これは A と言っても良いし、B と言っても良い」というコンサルタントの助言である。当該の言語をよく知らない調査者は非常に困惑する。基本的な前提として形式が異なるのは意味機能の違いに依拠するという考えがあるからだが、本書でも述べられているように、時に「男ことば」「女

段とすべきだ、と主張している。また多くの小節を含む長い章よりも、個別的なテーマにしたがった章を多く配置するほうがよいとする。他方、文法説明に必要な類例は最小限にとどめるべきで、何十も例を挙げて冗長な解説をするのは好ましくないとしている。

そして参照文法は統合的なものであり、読者はよくやりがちな拾い読みではなく、最初から最後まで一貫して読むことがやはり求められるとも述べている。

3 本書の特長と問題点

3.1 手始めに何を調べるべきかを明確に伝えている

日本の大学では「言語調査法」や「フィールドメソッド」を教える講座は非常に少ない。アメリカの大学のように言語学科の1つの大きな役割として言語調査法の教育を掲げているのは大きく異なる。そのため、特に日本で教育を受ける言語学徒やこれまで言語学の教育を受けてこなかった人々に対し、本書はフィールド言語学の目標に向けてなすべきこと、方法論の全般を概説する点で、大きく貢献する。

フィールド言語学に関連する書籍は理論言語学のそれには比すべくもないが、いくつか存在する。その代表例としては表3のものを挙げられよう。

表3 フィールド言語学に関連書籍

書名	図1での略号
Burling (1984 [2000])	LFL
Bouquiaux and Thomas (1992)	SDUL
Chelliah and de Reuse (2011)	HDLF
Dixon (2010a)	BLT1
Dixon (2010b)	BLT2
Dixon (2012)	BLT3
Gippert (et al. 2006)	ELD
Newman and Ratliff (2001)	LF
Payne (1997)	DM
Payne (2006)	ELS

本書(図1では‘AG’と省略)を含め、評者がこれらの関連書籍の相関性を図示化したものが以下の図1となる。なお、略号は書名の頭文字を利用して付けてある。

どのような書物にも大きなテーマが存在し、そのテーマと関連する周辺的な部分は副次的に扱われるものである。表3に掲げられたフィールド言語学関連書籍もそれぞれのテーマにしたがって読み進めるべきで、各々に記述の強弱が見受けられる。ただし、図1の相関関係と本稿

ことば」や世代差などの社会的要因が絡む場合がある。同一意味範疇で複数の形式が交替可能であるような助言を受けた場合、可能な限りその差異の要因を探ることが求められよう。

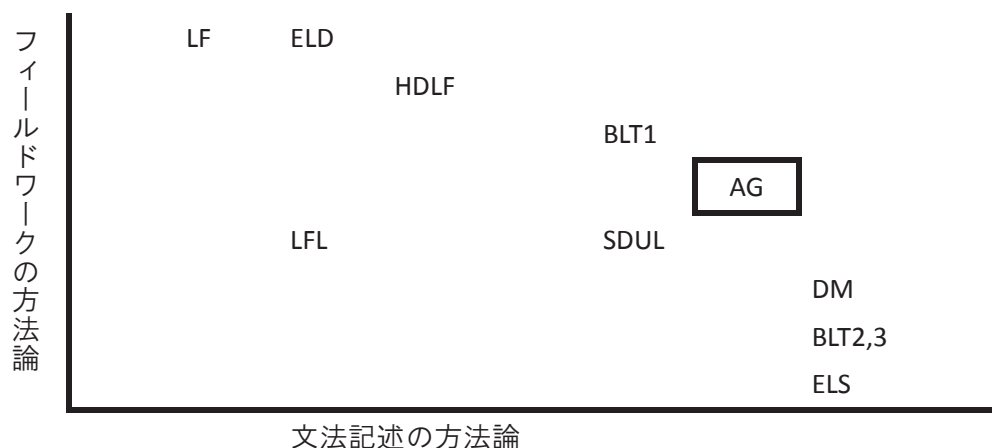


図1 フィールド言語学関連書籍の相関関係

での評価はあくまで評者の主観的な印象を元に述べられていることを了解されたい。

まずここに掲げた11冊を「フィールドワークの方法論」と「文法記述の方法論」の2つの観点から整理した。縦軸の「フィールドワークの方法論」では、上に行けば行くほどその方法論の記述(エリシテーションやテキスト採集の方法や、現地コミュニティとのつきあい方など)が多くなり、下の位置ではフィールドワークの方法論の記述は少なくなる、ということを示している。横軸の「文法記述の方法論」も同様に、右に行けば行くほど文法記述の方法論(参照文法に盛り込む内容、具体的には音韻論や形態統語論の記述すべきテーマなど)が多く示され、左に行けば行くほど少なくなることを、表している。例えば、LFは文法記述の方法論には強くないものの、フィールドワークの方法論には非常に強い。一方、ELSは文法記述の方法論を大いに展開しているが、フィールドワークの方法論はほぼ説明がなされていない。

本書は黒枠で囲ったAGで表示している。評者の印象ではフィールドワークの方法論についてLFL, SDUL, DMなどよりも詳しく記述しながらも、全体的には文法記述の方法論をコンパクトに、しかしわかり易く丁寧に記述し、横軸では大きく右に配置され则认为している。本書の読了後は、文法記述の方法論についてはDMやBLT2,3を、フィールドワークの方法論についてはBLT1あるいはLFやELDを読むと、本書の内容を十分に補完できるだろう。

3.2 分析で迷いがちな部分についても明快かつ簡潔に解説

言語学の初学者をはじめ、多くのフィールド言語学徒は音韻論の分析においても、形態統語的な分析においても様々なデータに困惑させられる。例えば、ある音と類似する特徴をもつ別の音が音韻的に対立する関係にあるのかや、音韻語と文法語の違い、形態素の境界、格標示と項構造の問題、テンス・アスペクト・ムードや証拠性、さらにはボイスなどの文法現象の分析で当該言語がどのような特徴を真に有しているのか、一見して迷うことがある。

本書ではしばしば判断に迷うような派生と屈折の違い(表3.2)や接辞と倚辞の区別の仕方(表4.6)などについて表にして整理してある。分析の際のチェックリストとしてこのような整理は

大いに役立つだろう。

もちろん詳しい解説は **3.1** にも挙げた Dixon (2010a, b, 2012) などを参照すればよい。言語学の初学者は他書をやはり参照すべきである。他方、すでに経験豊富なフィールド言語学徒や基礎的な言語学のコースを修了した博士課程の学生などは知識の整理や確認のために本書を用いることは大いに役立つだろう。本書では分析における注意点⁸を含めて、類型論的な情報がコンパクトにまとめられている。そのため、簡単に重要事項を確認するには本書は非常に有用である。

3.3 各言語データの出典が見にくいことと表記の一貫性

特に第4章から第13章では多くの言語データについて、具体的な説明を加えている。ただし、それらの中には著者のオリジナルのデータではないものがある。それら著者が独自に収集したデータが出所でないものは各章末の **Notes and sources** (注と参照文献) を見なければならない。しかし、当の **Notes and sources** はデータのソースだけを載せているのではない。他に参照すべき文献もあわせて掲載している。よって、本書で引用された例のソースとの区別が一見してわかりづらい。データのソースについては、引用した箇所でも明示しておいたほうがわかりやすかったのではないかと思われる⁹。

データのソースの引用における問題の一例を挙げよう。**5.6** 節では形容詞の下位分類について述べている。その中で日本語には「屈折型の形容詞 (inflected adjectives) [イ形容詞に相当]」と「いわゆる『非屈折型』の形容詞 (so-called ‘uninflected’ adjectives) [ナ形容詞に相当]」があると説明している。そして、この説明のソースについて **Notes and sources** を見ると、日本語のソースについては一切言及していない。推奨文献としては Dixon (2004, 2010a, 2010b) が挙げられている。しかし、それは日本語のソースではない。実際にこの分析は Backhouse (2004) などに依拠していると推定されるが、本書には参考文献でも提示されていない。やはりソースの提示方法は改善すべきだろう。

またこれに関連して、データのソースや参照した文法が多様であるにも関わらず、ソースの表記法をそのまま本書でも採用して例を挙げているため、時として読者に誤解を与えかねない

⁸ いくつかの箇所で注意点 (WARNING あるいは TO REMEMBER) が強調されている。フィールド言語学の初学者だけでなく、経験者にとっても重要な箴言であるので、よく理解しておくべきだろう。以下、評者の整理を掲げる。

WARNING: 「意味役割と統語関係の区別の重要性」 (p.222)
 TO REMEMBER: 「すべての言語に記述すべき文法があること」 (p.5)
 「辞書とともに文法も現地コミュニティに喜ばれること」 (p.9)
 「類型的類似性と歴史的系統の区別の重要性」 (p.35)
 「自由な交替を抑制的に認めること」 (p.311) [脚注7も参照]

⁹ もちろん、多くの言語からデータを引用する際にこのようなやり方も便利な部分があるのかもしれない。実際、Dixon (2010a, b, 2012) でも本書と類似したやり方をとっている。しかし、Dixon (2010a, b, 2012) では多くの箇所でやはり一般的なソースの提示方法もっており、本書とやや異なると思われる。

事例も散見される。

例えば、本書では東南アジアの言語として Enfield (2007) のラオ語文法をしばしば引用している。本書でも p.273 に以下のような語彙が Enfield (2007: 166) のとおりに引用されている。

(1) *lèèn1* ‘run’, *nam∅-kòòn4* ‘CLASS.TERM:LIQUID-chunk’, *phùùn4* ‘floor’, *lèka∅* ‘LINKER’

(1) の語彙に見られる母音の /è//ò//ù/ は本書 4.2 節で引用されたユフップ (Yuhup) 語 [アマゾン地域; マク諸語、本書は Silva and Silva (2012) から引用] の例のように低声調の母音をあたかも指すように見える。しかし、実際にはこれは Enfield (2007) で独自に採用された表記法である。/è/ は /ɛ/ を、/ò/ は /o/ を、/ù/ は /u/ を表す。誤解を生まないためにも、表記をわかりやすく工夫しておくべきだろう。

3.4 音声学・音韻論の説明について

本書は第 4 章で、音声の記述に関する手順を示している。これは類書である Payne (1997, 2006) などと異なった優れた特徴と言える。音声学・音韻論は形態統語論の記述と分けて、独立に論じられることが多い。その点で多くの書籍でも単著にまとめられることが一般的である。本書は文法執筆においてどうしても避けられない分野として位置づけている点は重要なポイントだと考えられる。ただし、説明の順序や内容については若干の工夫があってもよかったですのではないかと思われる部分もある。

例えば、4.1.1 節の子音の記述では子音体系のサンプルを表 4.1 に示している。この表では閉鎖音系列において両唇音と歯茎音に無声無気音・無声有気音・有声無気音の 3 対立を有しているのに、軟口蓋音には無声無気音しかないことや、流音に /l, r, ɹ/ の 3 対立を見出している。もちろん、この表自体はあくまでサンプルであるため、類型論的に非常にいびつな体系でもよいとは言える。しかし、もう少し一般的な体系のものを出して説明しても良かっただろう。

また表 4.1 では /w/ を dorso-velar と labio-velar をまたぐ音と位置づけ、両唇音との近接性を重視して、両唇音の隣に配置している。この考え方自体は理にかなったものではある。ただし、両唇音の列全体を軟口蓋音の右隣に配置した表は非常に特異なもので、/w/ の位置づけを重く見過ぎた結果であると言わざるをえない。両唇音は一般的に表の左端に位置づけられることによって、調音器官の先頭をイメージできるようになっている。本書のような方法も確かに理解できる。しかし、表では一般的なものを載せ、本文の説明で「言語によっては両唇音を軟口蓋音の右隣に配置した表としてもよい」といった形で補っても良かったのではないだろうか。

説明の順序などについても一考の余地がある。

4.1.1 節の子音の箇所では、発声についても言及している。確かに有声音や氣息音についても発声と関与する。しかし、ここできしみ声 (creaky) や息漏れ声 (breathy) にまで言及してしまっている。一方で、より強くこれらが関与する母音のところでは説明がない。これら「特徴的な」発声についてはやはり適切な場所で説明するほうが特に初学者には良かったと思われる。

同様に 4.1.2 節の母音のところ、成節子音についても言及している。しかし、本来はその次の音節構造の小節 (4.1.3 節) で説明すべきだったと思われる。ついでながら、ここでは成節子音

の符号に ‘.’ を用いている。これは印欧語比較言語学での慣習である。一般的には文法記述には国際音声字母 (IPA) を用いるため、無声音を表記する ‘.’ に代わって、‘.’ を用いるべきだろう。

更に付け加えると、様々な内容をコンパクトに詰め込もうとするあまり、説明に物足りなさを感じる部分も存在する。例えば、音韻語と文法語の違いなども第4章で扱っている点は非常に重要である。一方で、本書では超分節音に関する記述がその分薄い。確かに多くの言語学関連書でも分節音の記述に比べて、超分節音の記述は少なくなる。本書でも多分にもれない。

超分節音の術語の使用法については分節音のそれに比べて実は多様である。評者は早田 (1999) に倣い、「アクセント」を「音韻語内の卓立位置」とし、また「声調」を「当該言語で規定される有限個の超分節要素」と見なしている¹⁰。この立場に立てば、日本語の東京方言はアクセント言語に、鹿児島方言は声調言語であると分析される。

しかし、本書では術語の対立項が「ストレス」と「声調」であり、「ピッチ」は「ストレス」の顕現される要素の一部として見なされている (4.2 および 3.1 参照)。つまり、本書では「ストレス」を一般的に言う「アクセント」と同義に用いている¹¹。また「声調」は「ピッチの違い」によって、「語と意味を区別する」と述べている。これでは「ピッチを用いたストレス言語」と「声調言語」の区別ができない。このとおりにアジアの言語を記述すると、読者に誤解を与えかねないだろう。他の章の記述における鮮やかさが第4章では見られなかったのは残念である¹²。

¹⁰ 実際の早田 (1999) での「アクセント」と「声調」の説明は以下の通りである。

「「アクセント」はそれが当該単位 (例えば単語) の「どこに有るか」ということが問題になるものである。第1音節にある, 第2音節にある, 後から2番目の音節にある等々。」(早田 1999: 9)

「「トーン」とは, 当該単位 (北京語なら音節) に有るのは「どれなんだ (どのトーンか)」ということが問題になるものである。北京語には四声すなわち4種類の音節単位のトーンがあるが, 当該単語のトーンはその四つのうちのどれなのか, ということが情報になる。」(早田 1999: 9)

¹¹ 上野 (2011) によると、英語圏では「強さアクセント (つまり、ストレス)」を「アクセント」と呼ぶことが多い。古本真氏 (私信コメント) によると、バントゥ言語学でも「ストレス」と「アクセント」を同じ意味で用いるようである。そして、キャットフォード (2006) や Ladefoged & Johnson (2011) をはじめ、多くの音声学の入門書などでは「ピッチ」と「ストレス」を対立する概念として捉えている。キャットフォード (2006) と Ladefoged & Johnson (2011) では「アクセント」という用語を用いていない。一方、日本語で書かれる斎藤 (2009) や早田 (1999) などでは、この両者を包含する概念として「アクセント」を用いる。

基本的に英語で書かれた教科書は印欧語をはじめとしたストレスを持つ言語の音声学的解説が中心であり、ピッチは、イントネーションの問題を除けば、ストレスの付随的特徴の一部として理解される。そしてピッチが語義の弁別に用いられる場合はトーン (声調) であると見なされる。Ladefoged & Johnson (2011: 260–261) ではストレス・トーン・ピッチの区別の問題を整理しているが、日本語について最終的に「ピッチ・アクセント」の言語としながらも、その性格付けとして「ある意味トーンとストレスの間に位置づけられるケース」としている。Aikhenvald 氏の本書の立場もキャットフォードたちの立場に近いものであるとも言えるかもしれない。ピッチが語義の弁別に用いられるという点だけであれば、日本語と中国語は同じ音調システムをもつと分析されるが、東アジア諸語の研究者の多くは受け入れないだろう。日本語や東アジアの諸言語におけるアクセントの議論が西洋のものとは噛み合っていないとみなせる。

¹² 著者は複数の言語の詳細な文法記述を行っている経験豊富なフィールド言語学者であるが、経歴を考えると、文法記述の問題を主体に研究してきた。そのことが、本書の音韻論の取り扱いの薄さの要因の1つとなっているのかもしれない。

4 フィールド言語学徒、そして日本語話者の言語学徒のために

本書を通読して得られる情報はすこぶる多い。特にアジアを中心に研究活動する言語学徒にとっては、南北アメリカやオーストラリアの先住民語の情報をわかりやすく伝えてくれることは、視野の拡大に大いに役立つ。以下では、フィールド言語学徒、そして日本語話者の言語学徒が本書をどのように活用し、また今後どのように学習や研究を進めていくべきか、管見を述べて、本書評を締めくくりたい。

4.1 フィールド言語学徒にとっての本書

学位取得あるいはその他の目的で未知の言語を研究しようとするフィールド言語学徒にとって、新たなフィールドに赴く行為はまさに旅そのものと言えよう。気ままにあてもなく好きな場所を訪れる旅は非常に楽しい。ただし、フィールド言語学徒の旅は現実的にはさほど自由なものではない。限られた時間と資金に縛られながら、着実に成果を上げることが昨今特に求められている。そのような厳しい条件の中、本書の果たす役割はまさにその副題に示されるように「実践的な手引書」なのである。

フィールド言語学には、現地へ行く前の準備に始まり、現地調査、そして調査によって得られたデータの整理と分析、その成果公開が一連の仕事として存在する。以下では、フィールドワークへの準備から調査そのものの段階と、文法記述を行う段階について、本書と関連文献の読み進め方を提示しておきたい。

4.2 フィールドワークのために

まず、現地へ行く前には pp.20–29 に示される **Appendix: Excursus – Linguistic Fieldwork** (付録: 追記 – ことばのフィールドワーク) および **Box 1.1** “Essential principles for successful fieldwork in linguistics” を読んでおくといいたい。ここにはフィールド言語学で行うべきことが(かなり理想的に)書かれている。まず、文法分析は媒介言語によるエリシテーション(elicitation)による調査ではなく、テキストないし会話の収集データに依拠することが最も重要であると述べられている(動物相や植物相の語彙調査はエリシテーションが有効であるとも述べている)。また調査者はできるだけ早くに対象言語の運用能力を高め、対象言語によって参与観察できるようになるべきであるとも述べられている。録音や録画機材などの装備はできるだけ最小限にとどめるべきだといった実践的なことについても整理されている。

これを読んだあとは、本書が思想的に共鳴していると考えられる Dixon (2010a) の第9章 “Field Linguistics” を読むといいたい。そこではフィールド言語学徒がすべきこと、そしてしてはならないことが簡明にまとめられている。

さらにもっと具体的なイメージを掴みたいという場合は、Newman and Ratliff (2001) がフィールドワークの方法について詳細に検討しているので有用であろう。Newman and Ratliff (2001) ではフィールド経験の豊富な言語学者が言語研究プロジェクトの立て方から、協力者と調査者の関係、モノリンガルアプローチ(媒介言語を用いずに調査する方法)などについてつぶさに述

べている。こちらは目的に応じて読み進めることによって、方法論についての理解を深められるだろう。

日本語話者の言語学徒は、質問調査については林 (2004)、フィールドワークの方法全般については宮地ほか (監修 2010, 2011) などとも有用なので、参考になる¹³。特に林 (2004) は日本でよく用いられる方法について、その長所と短所を整理している。

いずれにせよ、フィールドワークに行く前に、言語学に対する最低限の基礎知識は必要である。特に言語学の初学者は気をつけたい¹⁴。本書の第 3 章はそのためにはまず読んでおくべきである。また Dixon (2010a) の第 1 章から第 7 章は特に熟読に値しよう。日本語話者の場合は、この他に風間ほか (2004)¹⁵や斎藤 (2010)¹⁶が便利である。各々記述に強弱があるが、標準的な教科書として用いることができる。

上記に掲げた参考文献はいずれも概説的なものである。実はフィールドワークは言語分析の実践そのものであり、分析の訓練をある程度積んだ上で臨むのがやはり好ましい。日本語で書かれた言語学の教科書は言語データの分析の訓練を促すものが極まれであるのが残念である¹⁷。一方で、英語で書かれた教科書 (Fromkin ed. 2000, Payne 2006, Akmajian et. al. eds. 2010 など) では基礎的な訓練を行える練習問題が付されているものがある。また別冊でワークブック (Ottenheimer 2006, Farmer and Demers 2010 など) が施されているものもある。特に初学者はできればある程度取り組んでおきたい。

そして、本書はとりわけ音声学や音韻論に対する扱いが弱い。これだけでは実際に音声の聞き取りや音素分析、語彙調査といった言語調査の特に最初に行われる仕事にたどり着けない可能性がある。そのためには音声学の訓練や音韻論の基礎の把握、音素分析の訓練は別の教科書

¹³ フィールド言語学は言語人類学的調査の一部として位置づけられることも多い。言語人類学的調査については宮岡 (編) (1996) などとも参考になる。

¹⁴ 言語学も他の諸科学と同様、細分化の歴史を歩んできたことにより、各研究者が専門とする領域も非常に小さい範囲に絞られる傾向が出てきた。しかし、フィールド言語学の目標は研究対象言語の全体像を明らかにすることである。音韻論だけ、形態論だけ、あるいは統語論だけの研究が不可能な学問領域である。各研究者により得意な分野が偏ることはある意味必然的なことだとしても、全般的な視野を持って臨みたいところである。また、フィールド言語学という手法は言語人類学や社会学・心理学とも強く関連する。人間の社会的関係性の問題を意識しながら言語学上の問題を解き直すことや学際的な観点も重視されつつある。この点についてはバーリング (1974), ハイムズ (1979), Duranti (1997), Foley (1997), Enfield (2002), 唐須 (編) (2008), エンフィールド (2015) などが参考になるだろう。

¹⁵ この本はまさに現代言語学の基本事項をバランスよくまとめている。特に第 5 章の類型論、第 6 章の歴史言語学、第 7 章の音声学・音韻論は言語学の初学者は熟読しておくことよと思われる。残念ながら、この本では社会言語学について扱っていないので、他書で補う必要がある。また統語論については本書と並行してやはり他書も読んでおくべきだろう。

¹⁶ この本は風間ほか (2004) と異なり、社会言語学まで含んだ全般的な記述がなされている点でバランスが取れている。しかし、全般的なことに目配せしようとするあまり、各項目の記述が少なく、初学者にはむしろ向いていない側面もあろう。「入門」と銘打たれているが、一旦基礎を終えた学習者の覚書として利用するほうがよいかもしれない。

¹⁷ 日本語のものの中でも柴谷ほか (1981) や東京大学言語情報科学専攻 (編) (2011) などは解説と練習問題が付いている。後者は体系性という観点からはややバランスを欠いたところがあるが、初学者の知的好奇心をかきたてる工夫と巻末の練習問題の解答例がある点は長所と言える。

(Katamba 1989, Roca & Johnson 1999a, 1999b, Odden 2005, キャットフォード 2006, Ladefoged & Johnson 2011¹⁸ など) で補っておくべきだろう¹⁹。音声記号の理解や音声学の事項についてはプラム・ラデュサー (2003), 城生ほか (編) (2011) を手元においておくとよい。

4.3 よりよい文法記述をめざして

フィールド言語学の仕事は調査だけではない。冒頭の土田 (1978) にも示したように、整理・分析・発表という気の遠くなるような作業が続く。本書は何を調べるべきかという点でとても有益な情報を提供してくれている。特に本書の第 2 部ともいえるべき第 4 章から第 13 章はいずれも各文法書が記すべき内容を整理してくれている点では必読といえよう。

ただ、本書は世界中の文法書の細かい情報を示したわけでもなければ、類型論的な考察を行った書物でもない。あくまで文法をより良く書くための「ガイド」なのである。よって、一字一句本書にしたがって文法を執筆しても、他の研究者の興味をひく文法は一向に書けないだろう。本書では多くの文法書で書かれているテンス・アスペクト・ムードの問題や、ボイスの問題、語順の問題などについては簡単に触れる程度となっている。しかし、これらはいずれも大きな問題である。各問題につき一章を割くべき価値がある。参照文法執筆の際、本書のまとめのように、軽く触れる程度では済まされない。

これらの文法現象を執筆する際、当該言語の特徴をあぶり出しながら、類型論的な位置づけを行うには、Shopen (ed.) (1985a, b, c), Shopen (ed.) (2007a, b, c) が大いに役立つだろう。いずれも音韻論に関する記述は皆無であるが、文法の各部門に関する類型論的概説は有用である。Shopen (ed.) (2007a, b, c) は Shopen (ed.) (1985a, b, c) の改訂版の位置づけである。しかし、両者では異なる執筆者が担当する章もあり、いずれの版も参考になる²⁰。

また著者の Aikhenvald 氏とともに研究仲間である Dixon 氏が編集している、各文法項目の類型論的考察をまとめた研究書が近年盛んに刊行されている (Dixon & Aikhenvald 2000, 2002, 2004, 2006, 2009, Aikhenvald & Dixon 2001, 2003, 2006a, b, 2013, 2014 など)。これらは特に冒頭の概説とともに、読者の研究対象の言語と地域的あるいは系統的に近い言語の章を中心に読み進めることで、記述の焦点がつかめることと思われる。いずれも本書の内容の理解をさらに

¹⁸ Ladefoged & Johnson (2011) は第 6 版である。2015 年には第 7 版として Ladefoged & Johnson (2015) が出版されたが、評者は未見である。第 6 版は CD が添付されており、音声の聞き取り訓練などに効果的である。

¹⁹ この他にも国際音声字母 (IPA) と実際の音声との対応を知るには以下のウェブサイトも有用である (いずれも 2016 年 2 月 16 日閲覧)。

i) 東京外国語大学言語モジュールによる音声記号の解説サイト

<http://www.coelang.tufs.ac.jp/ipa/>

ii) 国際音声字母の学習促進サイト (注: 国際音声字母協会のものではない)

<http://www.internationalphoneticalphabet.org/ipa-sounds/ipa-chart-with-sounds/>

iii) カナダ・ヴィクトリア大学言語学科の解説サイト

<http://web.uvic.ca/ling/resources/ipa/charts/IPAlab/IPAlab.htm>

²⁰ 例えば、文の種類に関する章は、Shopen (1985a) では Jerrold Sadock と Arnold M. Zwicky が、Shopen (ed.) (2007a) では Ekkehard König と Peter Siemund が担当している。

深めるはずである。

そしてとりもなおさず、特に読者の研究対象の言語に地域的あるいは系統的に近い言語の参照文法を通読しておくことは、読者自身の文法記述においても大きな力となる。また自身の文法記述の際に、近隣の言語で問題となっているテーマを意識しながら、研究を進めれば、完成した自身の文法は対照言語学・言語類型論・歴史言語学の観点から参照されやすくなると思われる。

なお、日本語話者にとってはエヴァンズ (2009)²¹が参照できることは大きい。これは講演録であるが、記述文法を書くにあたっての心構えがコンパクトに、かつバランスよくまとめられている。

5 おわりに

本稿では Aikhenvald 氏の最新刊の *The Art of Grammar* の概要をまとめ、その特長と問題点を指摘し、特にこれからフィールド言語学を行う人々、あるいは言語学を始めようとする人々に対する推奨文献を記述した。最後に、評者自身の自戒も込めて、以下の 2 点を今後の注意点として述べ、筆を擱く。

1 つは、フィールドワークで得られる経験は個別事象の集合体であることである。それゆえに、他のフィールド経験は傾聴に値し、大いに参考となるものの、そのまま別のフィールド調査に当てはめることはできない。フィールド言語学徒は 1 回 1 回の経験を積みながら、独自にフィールド言語学の方法論を紡ぎ上げるしかない。他のフィールド言語学徒との情報交換は積極的に行うべきであるし、フィールド言語学に関する文献はやはり読むべきである。しかし、それらの他者からもたらされた知識を金科玉条とすべきではない。

もう 1 点は、学術共通語として用いられる英語での論文執筆・文法執筆である。著者は数多くの言語の調査経験をもち、多くの言語を解する異能の言語学者である。ここで、本書の参考文献を見ていただきたい。大変残念なことに、本書では英語あるいは西欧語以外で書かれた文法書はほぼ無視されている²²。これを研究者の怠慢だと批判することはたやすい。しかし、どれほど多くの言語学徒が自分の知らない言語で書かれた文献を読むために、その言語を 1 から学習し始めるのか、相当に心もとない。つまり、英語以外で書くことは、畢竟、読者をかなり狭めることにつながる。

²¹ これに加えて、エヴァンズ (2013) は危機言語 (消滅の危機に瀕する言語) の問題を扱った書物であるが、特に第 10 章は危機言語を扱うフィールド言語学徒にとって重要な心構えが書かれている。

²² 著者は日本語・中国語・朝鮮語、その他アジアの諸言語にも強い関心を抱いているように見える。膨大な研究の蓄積のある日本語・中国語・朝鮮語に対しても、英語以外で書かれた文献 (当該言語で書かれた研究) は一切参照されていない。東南アジアの諸言語もラオ語が多く引用されているのは Enfield (2007) が本書の方針と親和性のある形で書かれた英語による参照文法だからである。タイ語も引用されているものの、東南アジアの大言語であるベトナム語やクメール語は一言も言及されていない。もちろん、本書のようなコンパクトな書籍ですべての言語に言及することは無理である。しかし、それ以上にベトナム語とクメール語に信頼に足る英語で書かれた参照文法が見当たらない (あるいは極めてまれである) ことのほうが問題となるのである。

母語で論文を執筆することはもちろん大切である。そして、それは母語の言語生活におけるかけがえのない営為である。ただし、ここでより重要なのは文法などの執筆に用いられる英語は、もはや文化の 1 要素ではないことである。論文の英語はコンピュータソフトや数式と同じように、完全に道具のようなものとしてみなされるものである^{23 24}。母語でも旺盛に研究活動・論文執筆を行いながら、特に重要な学術的貢献がなしえるものについて英語で成果を積極的に公開することは 21 世紀の言語学徒にとってもはや免れ得まい²⁵。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2001. *Areal Diffusion and Genetic Inheritance — Problems in Comparative Linguistics —*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2003. *Studies in Evidentiality*. Amsterdam: John Benjamins.
- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2006a. *Grammars in Contact — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2006b. *Serial Verb Constructions — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2013. *Possession and Ownership — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2014. *The Grammar of Knowledge — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.

²³ 英語非母語話者は英文の巧拙に拘泥してはならないとも評者は考える。まずは内容を正しく理解してもらえようように訓練するためには、英語の学術論文の執筆経験が豊富な練達の研究者に添削してもらおうのがよいだろう。英語話者なら誰でも英語論文の達人ではない。それは論文の言語が文化に根ざしたものではなく、道具に限りなく近いからだと思われる。ある種の英語論文の「型」のようなものを身に付ければ、余裕のない非母語話者は美文を書く必要はない。明快性・論理性にのみ、まずはこだわり続けるべきであろう。

²⁴ もちろん英語で成果を発表しただけで、読まれるわけではない。内容の充実を図ることが最も肝要である。それと同時に成果を公開する場所についても十分留意すべきだろう。口頭発表については大きな国際会議に挑戦すべきである。また論文発表については国内外の有力な雑誌に投稿するのも重要である。一方で、最近は Academia.edu のような論文をウェブ上で公開できる仕組みも整っている。また紙媒体での雑誌だけでなく、ウェブ上でアクセスできる学術誌も増えている。このような環境を有効に活用したい。

²⁵ 更に自戒を込めてこれに付け加えるならば、言語学徒が現地コミュニティへの学術的還元を行うために、現地の共通語による辞書・文法書・テキスト集などの作成にも積極的に取り組むべきであろう。辞書やテキスト集が現地コミュニティに歓迎される点については本書でも p.25 に書かれている。

また最近技術の進展に伴い、紙媒体の辞書などに並行して、現地共通語と研究対象言語の音声つき対照語彙集やフレーズ集を作成し、現地コミュニティに配布することも貢献の 1 つと見なされるようである。Transcriber などは音声つき語彙集の作成に向いており、また SayMore や ELAN は動画とともに記録できるソフトとして用いられる。特に電子機器を用いることができるコミュニティにはこのような新しい記録方法も大いに歓迎されるだろう。

- Akmajian, Adrian, Richard A. Demers, Ann K. Farmer and Robert M. Harnish. 2010. *Linguistics. — An Introduction to Language and Communication.* (Sixth Edition) Cambridge: The MIT Press.
- Backhouse, Anthony E. 2004. Inflected and Uninflected Adjectives in Japanese. In R. M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.), *Adjective Classes — A Cross-linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Bouquiaux, Luc and Jacqueline M. C. Thomas. 1992. *Studying and Describing Unwritten Languages.* (English Translated Version) Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- バーリング, ロビンズ (Robbins Burling). 1974. 『言語と文化』(高原脩・本名信行 訳) 京都: ミネルヴァ書房.
- Burling, Robbins. 1984. [2000.] *Learning a Field Language.* Prospect Heights: Waveland Press.
- キャットフォード, ジョン カニソン. (J.C. Catford). 2006. 『実践音声学入門』(竹林滋・設楽優子・内田洋子 訳) 東京: 大修館書店.
- Chelliah, Shobhana L. and Willem J. de Reuse. 2011. *Handbook of Descriptive Linguistic Fieldwork.* Oxford: Blackwell.
- Crystal, David. 2008. *A Dictionary of Linguistics & Phonetics. (Sixth Edition)* Oxford: Blackwell.
- Dixon, R. M. W. 2004. ‘Adjective classes’ in typological perspective. In R.M.W Dixon and Alexandra Aikhenvald (eds.), *Adjective Classes — A Cross-linguistic Typology —*. pp. 1-49. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. 2010a. *Basic Linguistic Theory. Vol.1: Methodology.* Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. 2010b. *Basic Linguistic Theory. Vol.2: Grammatical Topics.* Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. 2012. *Basic Linguistic Theory. Vol.3: Further Grammatical Topics.* Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W and Alexandra Y. Aikhenvald. 2000. *Changing Valency — Case studies in transitivity —*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W and Alexandra Y. Aikhenvald. (eds.) 2002. *Word — A Cross-Linguistic Typology —*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W and Alexandra Y. Aikhenvald. (eds.) 2004. *Adjective Classes — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W and Alexandra Y. Aikhenvald. (eds.) 2006. *Complementation — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W and Alexandra Y. Aikhenvald. (eds.) 2009. *The Semantics of Clause Linking — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Duranti, Alessandro. 1997. *Linguistic Anthropology.* Cambridge: Cambridge University Press.

- Enfield, Nick J. (ed.) 2002. *Ethnosyntax — Explorations in Grammar & Culture —*. Oxford: Oxford University Press.
- Enfield, Nick J. 2007. *A Grammar of Lao*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- エンフィールド, ニック J. (N. J. Enfield) 2015. 『やりとりの言語学—関係性思考がつなぐ記号認知文化—』(井出祥子監修, 横森大輔・梶丸岳・木本幸憲・遠藤智子 訳) 東京: 大修館書店.
- エヴァンズ, ニコラス (Nicholas Evans). 2009. 「記述されていない言語の文法を書くには」(稲垣和也 訳) 大西正幸・稲垣和也 (編) 『地球研言語記述論集 1』 pp. 1–34. 京都: 総合地球環境学研究所.
- エヴァンズ, ニコラス (Nicholas Evans). 2013. 『危機言語 —言語の消滅でわれわれは何を失うのか—』(大西正幸・長田俊樹・森若葉 訳) 京都: 京都大学学術出版会.
- Farmer, Ann K. and Richard A. Demers. 2010. *A Linguistics Workbook*. (Companion to *Linguistics*, Sixth Edition) Cambridge: The MIT Press.
- Foley, William A. 1997. *Anthropological Linguistics: An Introduction*. Malden: Blackwell.
- Fromkin, Victoria A. (ed.) 2000. *Linguistics: An Introduction to Linguistic Theory*. Malden: Blackwell.
- Gippert, Jost, Nikolaus P. Himmelmann and Ulrike Mosel. (eds.) 2006. *Essentials of Language Documentation*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 林徹. 2004. 「外国語研究と質問調査」『日本語学 —現代の質問調査法—』(2004年6月臨時増刊号) pp. 55–63. 東京: 明治書院.
- 早田輝洋. 1999. 『音調のタイポロジー』東京: 大修館書店.
- ハイムズ, デル (Dell Hymes). 1979. 『ことばの民族誌 —社会言語学の基礎—』(唐須教光 訳) 東京: 紀伊國屋書店.
- 城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男 (編). 2011. 『音声学基本事典』東京: 勉誠出版.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編). 1996. 『言語学大辞典 第6巻 (術語編)』東京: 三省堂.
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健. 2004. 『言語学 第2版』東京: 東京大学出版会.
- Katamba, Francis. 1989. *An Introduction to Phonology*. London: Longman.
- Ladefoged, Peter and Keith Johnson. 2011. *A Course in Phonetics*. (6th edition, International Edition) Boston: Wadsworth.
- Ladefoged, Peter and Keith Johnson. 2015. *A Course in Phonetics*. (7th edition) Boston: Wadsworth.
- 宮地裕・甲斐睦朗 (監). 2010. 『日本語学』(特集: フィールド言語学の第一歩) 2010年10月号. 東京: 明治書院.
- 宮地裕・甲斐睦朗 (監). 2011. 『日本語学』(特集: フィールド言語学と文法) 2011年5月号. 東京: 明治書院.
- 宮岡伯人 (編). 1996. 『言語人類学を学ぶ人のために』京都: 世界思想社.
- Newman, Paul and Martha Ratliff. 2001. *Linguistic Fieldwork*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Odden, David. 2005. *Introducing Phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ottenheimer, Harriet J. 2006. *The Anthropology of Language — An Introduction to Linguistic Anthropology: Workbook, Reader —*. Belmont: Wadsworth.
- Payne, Thomas E. 1997. *Describing Morphosyntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Payne, Thomas E. 2006. *Exploring Language Structure: A Student's Guide*. Cambridge: Cambridge University Press.
- プラム, ジェフリー K・ウィリアム A. ラデュサー (Geoffrey K. Pullum and William A. Ladusaw) 2003. 『世界音声記号辞典』(土田滋・福井玲・中川裕 訳) 東京: 三省堂.
- Roca, Iggy and Wyn Johnson. 1999a. *A Course in Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Roca, Iggy and Wyn Johnson. 1999b. *A Workbook in Phonology*. Oxford: Blackwell.
- 斎藤純男. 2009. 『日本語音声学入門 [改訂版]』東京: 三省堂.
- 斎藤純男. 2010. 『言語学入門』東京: 三省堂.
- 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編). 2015. 『明解言語学辞典』東京: 三省堂.
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓 (編). 1981. 『言語の構造: 理論と分析 音声・音韻編』東京: くろしお出版.
- Shopen, Timothy. (ed.) 1985a. *Language typology and syntactic description I: Clause structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, Timothy. (ed.) 1985b. *Language typology and syntactic description II: Complex constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, Timothy. (ed.) 1985c. *Language typology and syntactic description III: Grammatical categories and the lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, Timothy. (ed.) 2007a. *Language Typology and Syntactic Description (Second Edition) Volume I: Clause Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, Timothy. (ed.) 2007b. *Language Typology and Syntactic Description (Second Edition) Volume II: Complex Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, Timothy. (ed.) 2007c. *Language Typology and Syntactic Description (Second Edition) Volume III: Grammatical Categories and the Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Silva, Cácio and Elisângela Silva. 2012. *A Língua dos Yuhupdeh: Introdução Etnolinguística, Dicionário Yuhup-Português e Glossário Semântico-Gramatical*. São Gabriel da Cachoeira: Pró-Amazonia.
- 東京大学言語情報科学専攻 (編). 2011. 『言語科学の世界へ—ことばの不思議を体験する 45 題』東京: 東京大学出版会.
- 唐須教光 (編). 2008. 『開放系言語学への招待 — 文化・認知・コミュニケーション』東京: 慶應義塾大学出版会.
- 土田滋. 1978. 「外国語の現地調査を志す人のために」『月刊言語』(1978年9月号. 特集: 野

外調査の言語学) pp. 30–36. 東京: 大修館書店.

角田太作. 2010. 『世界の言語と日本語 (改訂版) —言語類型論から見た日本語—』 東京: くろしお出版.

上野善道. 2011. 「アクセント」城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男 (編) 『音声学基本事典』 pp. 305–311. 東京: 勉誠出版.

補足

なお、本書中で評者が発見した誤植、あるいは修正すべきではないかと思われる箇所について以下の表に示しておく (該当箇所は太字にする)。

		誤 (修正すべき箇所)	正 (好ましい表現)
p.5	9 行目	<i>nO</i>	<i>nɔ</i>
p.68	4 行目	/botl/	/botɫ/
p.68	4 行目	/sædn/	/sædn̩/
p.72	4 行目	the bilabial trill B	the bilabial trill B
p.74	8 行目	-ŋ	/ŋ/
p.83	15 行目	Salish, families,	Salish families,
p.83	15 行目	predicates, and	predicates and
p.226	下から 15 行目	In Tschangla	In Tshangla
p.243	5 行目	on Tschangla	on Tshangla
p.293	下から 5 行目	Enfield (2004a)	Enfield (2002)
p.293	最終行	Enfield (2004a: 3)	Enfield (2002: 3)
p.342	2 行目	Enfield, Nicholas J. (ed.) 2004.	Enfield, Nicholas J. (ed.) 2002.
p.342	4 行目	Enfield, Nicholas J. 2004a.	Enfield, Nicholas J. 2002.
p.342	5 行目	Enfield, Nicholas J. 2004b.	Enfield, Nicholas J. 2004.

謝辞

本稿作成時には、倉部慶太氏・藤原敬介氏・古本真氏に草稿をお読みいただき、ご指摘・ご助言を大いに参考にしました。記して感謝申し上げます。

Abstract

Review: Alexandra Y. Aikhenvald *The Art of Grammar — A Practical Guide*— Oxford: Oxford University Press, 2015, xxiii + 380pp.

Norihiko HAYASHI

Kobe City University of Foreign Studies

This is to review a recent publication of field linguistics entitled as *The Art of Grammar* by Alexandra Aikhenvald. This book is a truly informative and substantial guide for field linguists to illustrate from “how to prepare for field trips” to “how to write and read a reference grammar,” which includes a kind of typological summaries of phonological and morpho-syntactic features in the world languages and warnings for language descriptions. This book helps the beginners of linguistic fieldwork to understand what to do in the field and what to write in a reference grammar, though if they do not know the fundamentals of linguistics they should complement them by reading other materials suggested in this review. For professional linguists (or Ph.D students), this book is useful as a checklist for linguistic fieldwork and analyses.

Keywords: field linguistics, reference grammar, field method, grammar description